

1. 癌の予防のために

- 禁煙
- バランスのとれた食事
- 脂肪分は控えめに
- 適量の飲酒

まず、がん予防のために一番していただきたいのが禁煙です。飲酒は、適量であれば健康維持に役立つという指摘もありますが、タバコは、胃がん、大腸がんに限らず、様々な臓器の発癌に関与することが分かってきました。

2. 癌と食事

癌の末期になると、食欲が落ちます。そのため、食事の代わりに点滴を行うことが多かったのですが、最近の研究では、末期癌患者に対して過剰な栄養を与えることで、症状の悪化を導くことが指摘され始めています。

癌になったことの悲しみは、家族がいてくれることへのありがたみを失う恐怖・苦痛でもありません。辛い節目であることには変わらなけれど、家族が与えよう愛情は、命同様に保護されるべきもの。それをサポートできる環境を作ることが、我々医師の務めだと思っています。

家族の太陽だったような、あるいは家族の柱であったような存在が病気になる、家族全体の心が揺れてしまいます。患者さんが痛みもがいて体を右によれば、家族もまた体を右によじるような現象、これではお互いを不幸にしています。本人が痛みに苦しんでいる、人生の希望を失って

患者さんに代わって癌になってあげることが、家族にも医者にもできません。癌と闘う患者さんを支えるためには、痛みや苦しみを最大限に理解しながらも、そうではない別のことを提示してあげなければなりません。本当の意味では本人の辛さを共有してあげられない。だからこそ、今、手元に失わずに保たれていることに目をむける。九死の真つ只中に置かれた状況の人は、そういった家族のサ

ポートがあるほど、再生の道を得られやすいと考えています。

食べられないのは罰ではない

消化器系の癌に関わらず、人は癌になると痩せ細り、やがて食べ物が摂れなくなります。お水さえも欲しくなくなってしまう。栄養を摂らなければ体は衰弱する。一方で、医療では、栄養を強制的に投与することが当然とされてきました。しかし、最近では末期の癌に高濃度の栄養を与えると消耗が進み、かえって寿命を縮めてしまう、ということを経験などが公式に認め始めています。

考えてみれば、病気を患って食欲が落ちるのは風邪も同じです。体が弱れば余計なエネルギーを消耗できませんし、水と食料は貴重ですから、最小限の栄養と水分で身体はエゴ運転に切り替わるのです。ですから、癌によって食事が食べられないことは、人間の順応力がそうさせているということ。そういうイメージを持ちながら、決して無理をしなくても良いんだ、ということをご家族も一緒に心に留めていただきたいと思っています。

共に関心を向けていくべきこと

癌に命を脅かされた状況をどう解釈するか。癌になったことを悲観するだけでは、癌に冒された当人は本質的な人生の意義を見失ってしまいます。たとえば、癌になる以前の、あの時の瞬間が、もしかしたら交通事故によって命を落としていたかもしれないと考え、命の見方も変わってきます。そういう道筋の元、極限まで命をまっとうできるのであれば、決して全てが不幸で塗り固められた人生ではないはずです。一緒に心を痛め、優しく支えてくれる人の存在、限られた命だからこそ密に生きようという意思のもと、患者さんとご家族と我々医師は協力しながら一緒にそういうことに目を向けていくべきだと思います。

まわりの人たちの何気ない思いやりや愛情表現が、癌と闘う患者さんを心強く支えます。人はどんな些細なことにも傷つきやすし、自己嫌悪にも陥ります。そういうときに、誰かが何気なく差し伸べてくれた手によって、人生が大きく救われるようなことがあるからです。

共に癌と闘いながら支える 患者にとつての家族の存在

癌に生きる患者と家族

人は癌を患ったとき、人生の大きな節目を迎えることになりま。そして、それは家族の人生にとつての大きなターニングポイントでもあります。今回は、癌患者と家族をテーマにお話します。

自分が癌になる、あるいは最愛の家族が癌になるという事実は、結果として家族が家族であることを再認識させる側面を持ち合わせています。むしろ、病気を通して家族関係を学ぶことは非常に多いものです。これまで憎まれ口を叩き合ってきた家族でさえ、本当はちゃんと愛し合っている、お互いがかけがえのない存在であることをあらためて思い知るきっかけとなります。

癌になったことの悲しみは、家族がいてくれることへのありがたみを失う恐怖・苦痛でもありません。辛い節目であることには変わらなけれど、家族が与えよう愛情は、命同様に保護されるべきもの。それをサポートできる環境を作ることが、我々医師の務めだと思っています。

同じ迷路にはまってはいけない

家族の太陽だったような、あるいは家族の柱であったような存在が病気になる、家族全体の心が揺れてしまいます。患者さんが痛みもがいて体を右によれば、家族もまた体を右によじるような現象、これではお互いを不幸にしています。本人が痛みに苦しんでいる、人生の希望を失って



安田クリニックでは、水・土曜日の午後の他、病状に応じて夜間の往診も行ない、在宅医療に積極的に取り組んでいます。



安田クリニック 院長
安田峯次

浜松医科大学医学部医学科卒業。浜松医科大学附属病院第一外科勤務。聖隷浜松病院外科勤務。社団法人有隣厚生会富士病院外科勤務。新都市クリニック外科・消化器科勤務、内視鏡センター長。日本消化器内視鏡学会専門医、日本外科学会専門医。日本消化器外科学会認定医。マンモグラフィ検診精度管理中央委員会検診。マンモグラフィ読影認定医師。

共に目を向けていくべきこと

癌に命を脅かされた状況をどう解釈するか。癌になったことを悲観するだけでは、癌に冒された当人は本質的な人生の意義を見失ってしまいます。たとえば、癌になる以前の、あの時の瞬間が、もしかしたら交通事故によって命を落としていたかもしれないと考え、命の見方も変わってきます。そういう道筋の元、極限まで命をまっとうできるのであれば、決して全てが不幸で塗り固められた人生ではないはずです。一緒に心を痛め、優しく支えてくれる人の存在、限られた命だからこそ密に生きようという意思のもと、患者さんとご家族と我々医師は協力しながら一緒にそういうことに目を向けていくべきだと思います。